

保育者養成校における卒後教育に関する考察

Study on Postgraduate Education in Child-Care Worker Training School

森 知子*

橘 実千代**

高田 正久***

Abstract

Recently, the social role of child-care workers has become more diverse. The child-care worker training schools should continue to provide opportunities for learning new knowledge and skills for the graduates who got a job in the child-care world, even after the graduation, so as to meet the diverse needs of child care.

Seiwa Junior College had held "SEIWA Summer Seminar" once a year as part of postgraduate education, and marked the 10th anniversary in 2009. An object of this paper is to consider the future for the postgraduate education of the child-care worker training school by reviewing the progress of the seminar during 10 years and clarifying the achievements and programs thereof.

キーワード：保育者養成、卒後教育、現職保育者、保育の質の向上

1. はじめに

保育をめぐる環境が様々に変化する中で、子どもの教育、保育を担う保育者の社会的役割は、ますます多様化している。保育者養成機関においては、課程の教育課程を経て保育の専門職に就いた卒業生に対し、多様な保育ニーズに対応していくための新しい知識や技術を修得できる場を卒業後も常に提供していく必要があるといえる。

幼稚園・保育園の園長を対象とした保育者養成への期待に関する質問紙調査（高旗・中田・池田，2007）では、（1）保育者の力量の基礎として、子どもや保護者の理解とともに保育者という職務への理解を養成、研修段階で身につけることが期待されていること、（2）保育施設として、保育者の力量向上、他機関との連携、保護者への相談・援助が一層必要であるとみなされていること、（3）養成段階において、環境、人権、健康、食事、発達障害などに対する教育が一層充実することが望まれてい

ることを明らかにし、養成段階から研修段階まで一貫する専門性の高い保育者養成体系の構築を求めている¹⁾。

保育者の専門性を高める養成教育のあり方を探るために、小松ら（2009）は、「養成期間において学んだこと」「保育者として巣立つ直前の不安」「卒業後、大学に何を期待しているか」等について明らかにすべく、短大卒業時の学生へアンケート調査を実施している²⁾。卒後教育のあり方を考察するにあたり、本研究の結果は、興味深い。それによると、学生たちは社会人として巣立つ喜びと同時に、保育者としての仕事をこなしてゆけるだろうかという不安を抱えていることが示唆されている³⁾。保育者として就職する上での不安について、選択式で尋ねた結果として最も高かったのは、「保護者との関係」であり、次いで「保育の知識や技能」、「他の職員との関係」となっている。続いて、「子ども集団をまとめられるか」「子どもとの信頼関係」「子どもの健康・安全に関すること」「社会人としてやっていけ

* Tomoko MORI 聖和短期大学専任講師（教育実習・保育実習）修士（教育心理学）

** Michiyo TACHIBANA 聖和短期大学准教授（障害児保育・保育原理）教育学修士

*** Masahisa TAKATA 聖和短期大学教授（音楽・基礎演習）芸術学士

1) 高旗正人、中田周作、池田隆英 2007 保育者養成に対する社会的要請の調査研究 中国学園紀要, 6 149-160

2) 小松秀茂、杉山弘子、東義也、荒井由美子 2009 保育者が養成校に求めている学び～卒業後2年目の保育者への質問紙調査から～ 尚絅学院大学紀要第57集 79-90

3) 同上

るか」「園の方針や雰囲気に関すること」の順に不安要因が高い結果となっている。一方、短大生活での成長感に対する質問については、85%の学生が「保育の専門的知識と技能を身につけることができた」と回答しており、現職に就くことに対する期待と不安が交錯している卒業生の胸中が本研究で見出され、卒後教育において、卒業生の悩みや不安に具体的に応える場の必要性について言及されている。

このように、養成教育から卒後教育へと継続する保育者養成課程のシステム化は、養成校に求められる課題の一つであり、その内容や方法の具現化について検討する必要があるといえよう。

聖和短期大学⁴⁾では、2000年度より、卒後教育の一環として毎年1回「SEIWA サマーセミナー」を開催し、2009年度で10回目の区切りを得た。本稿は、10年間の SEIWA サマーセミナー（以下、セミナーとする）の歩みを振り返り、その成果と課題を明らかにすることで、保育者の専門性を高めるために保育者養成校が担う卒後教育のあり方を考察するものである。

2. セミナー開催の経緯と概要

1998年よりセミナー開催の検討が行なわれた。質の高い保育者養成を行なうための検討、改善、改革が行なわれる中で、卒業生に対してより必要度の高い、内容ある再教育の機会を提供していくのは、保育者養成校としての責任であると考え、現職の卒業生が現在抱えている課題解決の手がかりや欲している情報を得る再教育講座の企画・実施が挙げられた。また、保育者を送り出している養成校として、「保育現場への情報発信」という社会的役割を担うべく、対象を卒業生だけではなく、実習園や近隣の幼稚園、保育所、施設などの保育現場へ広げ、卒業生、並びに現職保育者の再教育講座の企画・準備が進められた。

開催時期は、現職保育者にとって夏休み期間が参加しやすいのではと考え、「サマーセミナー」と名づけた。広報手段としては、本学の実習園や卒業生の就職園を初めとして、近隣並びに、実習園所在地、就職園所在地の各市の幼児教育課、保育課などに案内状を送付し、より多くの現職保育者に、講座の案内を試みた。

セミナー当日には本学の教員が全員揃い、運営に

関わった。課題を抱えた卒業生にとっては、講座への参加をとおして、専門知識や技術向上を図ると共に、その後個別に教員と相談することのできる場となったとも考える。

3. 10年間のセミナーのテーマおよび参加者数

セミナーのテーマは、保育を取り巻く今日的課題と現職保育者のニーズに合わせて設定した。主要なテーマを考案した後、講師を決定し、講師にテーマの主題を依頼した。2003年度（第4回）、2005年度（第6回）のセミナーは学内講師、他の年度は学外講師が担当した。

2000年度～2009年度における10年間のセミナーのテーマ、および各回の参加者数は表1のとおりであった。

第1回（2000年度）のセミナーのテーマは、かねてから卒業生からの相談が多くあり、保育現場にて切実な課題となっていた「家庭への対応」を取り上げた。子どもを取り巻く環境が変化している中で、保育のあり方もそれに対応することが求められていた。多様を極める育児相談や保護者への対応に、保育者が心を砕いているのではないかと考え、保育所や幼稚園などにおける子育て支援の役割を担っていくために、育児相談や保護者対応に役立てるようなテーマを選択した。また、1999年の保育所保育指針改定を視野にいたした内容とし、施設保育者も関心を持てる内容とした。

第2回（2001年度）は、前年同様、保育現場において、子どもや家庭への対応に複雑さや困難さが増しており、保育者はその資質として、人間関係の持ち方についての専門的な知識を身につけていることが必要と考え、保護者とのかかわり方などを学ぶために「カウンセリングマインド」をテーマに取りあげた。第3回（2002年度）は、第2回の受講者の多数の要望を受けて、前回の流れを引き継ぎ「カウンセリングマインド」を取り上げ、保育者の資質向上を図れるように、より専門知識を深める内容とした。

第4回（2003年度）は、日常の保育の中や行事などにすぐにでも使えるような造形に関する内容や技術習得を目的とし、授業再現のような内容を企画した。テーマを『「美術」の授業をもう一度』とし、体育館において、グループに分かれて実技形式の講

4) 2009年度より聖和大学短期大学部から聖和短期大学へ名称変更

義を行い、参加者自らが実際に製作して、保育実技習得の機会となるようにした。

集団生活する上で、いかに子どもの健康管理に適切な配慮をしているか、子どもの健康状態の維持は保育者の責任であると言われている。第5回（2004年度）のテーマは、「保育における病気の予防」とし、子どもの健康と安全を確保するための保育環境、保育活動の留意点を知り、特に衛生管理や感染症対策の理解、配慮する事柄など知識提供の場とした。近年、子どもの健康管理に対する警鐘がなされ、2008年に改定された保育所保育指針では、子どもの健康及び安全の確保が保育の基本であり、その体制充実が求められている。

第6回（2005年度）は、第4回と同様、実技形式の講義を行なった。保育の中で、保育者はその内容に配慮しているが、自分がどのような声で語り、歌っているかを顧みることは少ない。保育者の「声」は、毎日その声を聞く子どもにとって重要な環境の一つである。実際に声を発して、自分の声を再確認する機会が必要ではないかと考え、テーマに「保育者の声」を取り上げ、声の発声、相手への伝え方など実践方法を習得する機会とした。

第7回（2006年度）は、実習園、就職園など現場での対応への悩みの声が多く聞かれ、また参加者からの要望が強かった「軽度発達障害」をテーマとし

て取り上げた。保育現場では、ちょっと気になる子どもの対応に保育者が追われていたが、これまでは、子どもが示す問題行動よりも保育者の技量不足が原因と思われがちな課題であった。2007年4月に「特別支援教育」が学校教育法に位置づけられ、障害のある幼児児童生徒の支援をさらに充実していくこととなり、その実態と支援の方法等、知識・情報獲得の内容は時代の流れに対応した選択であった。第8回（2007年度）は、前年度の大きな反響と受講者の再度の要望を受けて、テーマは引き続き「軽度発達障害」を取り上げた。今回は事例を多く挙げ、子どもに対してのより具体的な支援方法が獲得できるよう企画した。

第9回（2008年度）は、前年度の参加者に対するアンケート調査の中で、クレーマーと呼ばれている保護者への対応に苦慮している保育者が増えてきているという声が多くあり、より具体的な対応を学ぶため、「無理難題要求をする保護者」をテーマに取り上げた。保育者が保護者対応を恐れたり、対応の方法論を学んだりするだけではなく、保護者の気持ちを理解、支援することのできるような内容を企画した。

第10回（2009年度）は、テーマに「絵本」を取り上げた。実際に絵本を読み聞かせながら、絵本の内容、読み方、選択の方法など、保育現場に活用でき

表1. セミナーのテーマおよび参加者数

回	年度	テーマ	形態	参加者数(人)
1	2000	家庭への対応を考える～幼稚園教育要領と保育所保育指針の改訂を視野に入れて～	講義	123
2	2001	保育者のカウンセリングマインド	講義	239
3	2002	保育者のカウンセリングマインドⅡ	講義	221
4	2003	「美術」の授業をもう一度受けよう	実技	294
5	2004	保育における病気の予防～衛生管理と感染症対策	講義	137
6	2005	心とからだに響く声～保育の中で自分の声を上手にいかしましょう～	実技	139
7	2006	LD・ADHD・アスペルガー症候群の理解と支援～幼児期から学童期へのアプローチ	講義	528
8	2007	LD・ADHD・アスペルガー症候群の理解と支援Ⅱ～保育現場における具体的なかわりかた～	講義	338
9	2008	子どものために手をつなぐ～園・学校へのイチャモン（無理難題要求）のウラにあるもの～	講義	267
10	2009	子どもたちと絵本を結ぶために～未来に生きる子どもたちに生きる力になる絵本を～	講義	165

る内容であると同時に、保育者の感性を高める内容とした。

4. 勤務先別にみた参加者数の特徴

各年度における参加者数を勤務先別（幼稚園・保育所・施設・その他）に分類し、表2にまとめた。各年度ともに、幼稚園保育者の参加が最も多かった。開催日を土曜日の午後（13時～15時）に設定したため、幼稚園保育者にとっては、参加しやすい条件であったといえる。卒後教育の開催日、開催時間については、勤務先の保育形態や勤務形態を考慮し、参加しやすい状況を提供していく必要がある。参加できる時期や時間帯が、職種によって異なるの

はやむを得ないが、なるべく多くの人が参加しやすい日程を決めるべく、毎回アンケート調査などで実態を把握し、開催時期、時間などの検討を重ねてきた。

勤務先による参加者数の推移は、図1に示すとおりである。

保育所勤務者の参加傾向をみると、2000年度から2003年度の4回にわたって、参加人数が増加している。1999年に保育所保育指針が改訂され、保育所の役割や機能が社会的に評価され、また職員の資質向上のための研修が強調されるようになった背景も重なっていると考えられる。その後、2001年の児童福祉法の一部改正に伴い、保育士資格が国家資格として法定化され、2003年より施行されたことにより、

表2. 各テーマにおける参加者の勤務先別参加者数 (単位：人)

回	年度	テーマ	勤務先				合計
			幼稚園	保育所	施設	その他	
1	2000	家庭への対応を考える～幼稚園教育要領と保育所保育指針の改訂を視野に入れて～	70	43	9	1	123
2	2001	保育者のカウンセリングマインド	153	71	8	7	239
3	2002	保育者のカウンセリングマインドⅡ	105	94	14	8	221
4	2003	「美術」の授業をもう一度	160	122	7	5	294
5	2004	保育における病気の予防～衛生管理と感染症対策	61	65	5	6	137
6	2005	心とからだに響く声～保育の中で自分の声を上手にいかしましょう～	80	49	6	4	139
7	2006	LD・ADHD・アスペルガー症候群の理解と支援～幼児期から学童期へのアプローチ	233	193	71	31	528
8	2007	LD・ADHD・アスペルガー症候群の理解と支援Ⅱ～保育現場における具体的ななかかわりかた～	167	127	25	19	338
9	2008	子どものために手をつなぐ～園・学校へのイチャモン（無理難題要求）のウラにあるもの～	123	112	14	18	267
10	2009	子どもたちと絵本を結ぶために～未来に生きる子どもたちに生きる力になる絵本を～	78	73	8	6	165

*その他には、福祉事務所、院内保育所などが含まれる
*施設は、保育所以外の児童福祉施設を示す

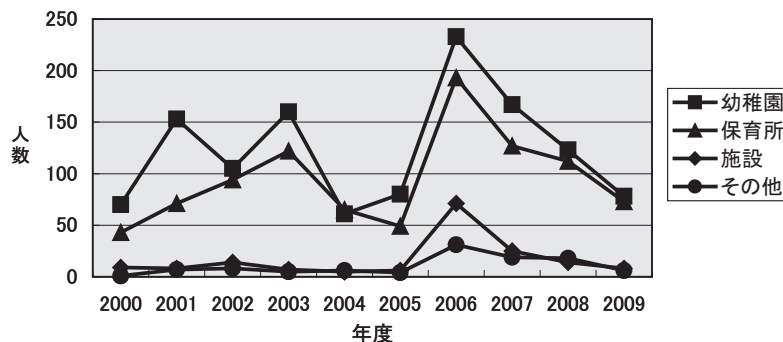


図1. 各年度における参加者の勤務先別参加者数の推移

保育士の専門性に新たな関心が高まった。保育士の職務が従来の保育という「ケアワーク」に加えて、「保護者に対する保育に関する指導」という「ソーシャルワーク」にまで拡大し、「子育て支援」としての「家族ケースワーク」や「カウンセリング」などの援助も期待されることになった⁵⁾。保育士養成課程においても2002年にカリキュラムの改訂がなされ、「社会福祉援助技術」「家族援助論」の導入が図られたこともあり、2001年度、2002年度のセミナーのテーマとして掲げた「保育者のカウンセリングマインド」は、意義のあるものであったと考える。保育を取り巻く環境の変化や施策に応じて、その時に見合ったテーマを設定することは、保育者養成校が提供する講座として必要な視点であるといえよう。

2006年度は、これまでの参加者からの要望が多かった「軽度発達障害」を取り上げた。幼稚園、保育所、福祉施設のいずれも参加者数が増加し、テーマへの関心度がみてとれる。当該年度は、参加申し込みが上回り、予定していた会場を変更し、600名が受講できる特設会場を設けて対応した。特に、勤務先として「その他」の参加者の中には、発達に懸念を持つ子どもの保護者も多く含まれており、卒後教育の一環としてのセミナーと併せて、大学が担う役割についても考えさせられる結果となった。

5. 保育経験年数別にみた参加者の特徴 —2007年度～2009年度における参加者へのアンケート結果より—

(1) 保育経験年数別参加者数

2007年度から2009年度において、セミナー終了後に参加者へアンケートを実施した。アンケート回収率は、2007年度71.6%（回収数242名）、2008年度84.3%（回収数225名）、2009年度92.1%（回収数152名）であった。保育経験年数を「1～2年目」「3～5年目」「6～10年目」「11～15年目」「16～20年目」「21年目以上」に分類し、各年度における参加者数をまとめた（表3）。また各年度における保育経験年数別の参加者割合を図2に示した。

保育経験1～2年目の保育者は、2008年度26.7%、2009年度28.3%と他の保育経験群より参加が多かった。本学のセミナーが卒後教育の一環として開催されていることを毎年、卒業を間近に控えた学生に学内で広報していることから、卒後1年目の卒業生にとってはセミナーに対する意識が高かったと考えられる。新任の保育者は、問題や課題を抱えて悩んでいる場合が多いが、養成校で講座に参加し、教員と語り合う中で、気持ちのきりかえができる卒業生

表3. 各年度における保育経験年数別参加者数 単位：人（%）

年度 保育経験年数	2007	2008	2009
1～2年目	45 (18.6)	60 (26.7)	43 (28.3)
3～5年目	54 (22.3)	50 (22.2)	34 (22.4)
6～10年目	61 (25.2)	36 (16.0)	29 (19.1)
11～15年目	34 (14.0)	26 (11.6)	13 (8.6)
16～20年目	13 (5.4)	18 (8.0)	10 (6.6)
21年目以上	35 (14.5)	35 (15.6)	23 (15.1)
計	242	225	152

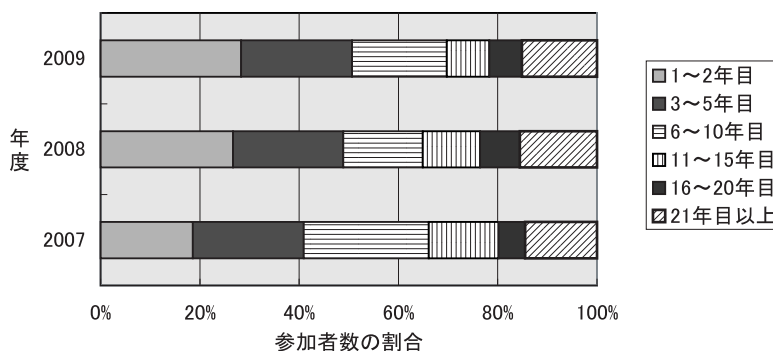


図2. 各年度における保育経験年数別参加者の割合

5) 社団法人全国保育士養成協議会専門委員会 2003 保育士養成資料集第38号 保育士資格の研究～法令資格から法律資格へ その本質を探る～ 社団法人全国保育士養成協議会 90-91

も多い。豊永（2000）は、大学が主催する現職者のためのセミナーについて、「卒後1～2年目をしっかり支えることによって、保育士としての専門性の基礎をゆるぎないものにする保育者セミナーは、養成校の果たす役割として不可欠のものであろう」と提言している⁶⁾。保育の実践の場で初めての学期を過ごし、想像していた保育の仕事と現実の狭間で、戸惑い悩みながらも日々の保育に専念してきた卒後1年目の保育者にとって、心の余裕ができる夏休みにこのセミナーが開催されることの意義は大きいといえる。

2007年度～2009年度の3年間のセミナーを振り返り、各年度ともに保育経験10年未満の保育者が参加者数の60%以上を占めた。先述したとおり1～2年目の保育者は、2008年度、2009年度において、他の保育経験群より参加が多かったが、2007年度については、6～10年目の保育経験群が最も参加者が多かった（25.2%）。この年度は、前年度に引き続いて「軽度発達障害」をテーマとし、子どもに対してのより具体的な支援方法の理解を深める内容で開催したこともあり、具体的な保育実践を積み重ねてきた保育経験6～10年目の中堅保育者にとって、関心も高かったといえる。

一方、16～20年目の保育経験群は、各年度ともに参加者が最も少なかった。この群は、30代後半から40代前半の年齢に該当し、既婚者の場合、子育てに手をとられる時期と推測される。一概には言えないが、夏休み、あるいは土曜日は、子育てを行なっている者にとっては、セミナーに参加する時間を確保することの難しさがあったとも考えられる。勤務時間内に研修出張として参加できる形の方が参加しやすい職種や年代もあるのではないだろうか。一方、21年目以上の保育経験群は、各年度とも15%の割合で参加している。参加しやすい立場にいるためか、

あるいは管理職期としての関心や責任の表れと考える。卒後1～2年目の保育者を支えていくにはこの時期の開催は適していたと思えるが、今後このようなセミナーを企画する場合、対象とする相手が参加しやすい時期を検討していくことが必要と考える。

（2）保育経験年数別にみた満足度

参加者へのアンケート結果の分析をとおして、保育経験年数別にセミナーの満足度を検証した。各年度ともに、「今回のセミナーに参加して良かったですか」という質問に、「とても良かった」「良かった」「あまり良くなかった」の3件法で回答を求めた。「あまり良くなかった」と回答した参加者は、3年間において1名のみであり、参加者にとっては満足度の高いものであったことが理解できた。「とても良かった」「良かった」と回答した割合を保育経験年数別に表4にまとめた。

2008年度において、「とても良かった」と回答した参加者は、21年目以上の保育経験者が最も多く（85.7%）、「保護者対応」に求められる内容に対して、管理職期ともいえるベテラン保育者の意識が高かった。保護者対応の切実さや難しさを知り、実際に対応を行なっているのはこの年代の保育者だと思われる。後にも述べるが、保育経験1～2年目の保育者の捉え方とは随分の違いがあるのではないだろうか。

また、2007年度、2009年度においては、11～15年目の保育経験者の満足度が最も高かったが、保育経験を積み重ね保育者としての自信も強くなり、講演内容の理解も高く、日ごろ行っている保育に、学んだ事柄を積極的に取り入れていこうとする意欲の表れではないかと考える。

表4. 保育経験年数別にみたセミナーの満足度 単位：%

年度 保育経験年数	2007		2008		2009	
	とても良かった	良かった	とても良かった	良かった	とても良かった	良かった
1～2年目	61.4	29.6	70.7	27.6	62.5	29.2
3～5年目	61.1	27.8	70.0	22.0	66.7	22.2
6～10年目	65.1	27.0	70.0	22.0	52.9	41.2
11～15年目	74.3	8.6	73.1	15.4	75.0	12.5
16～20年目	61.5	7.7	70.0	22.0	44.4	33.3
21年目以上	55.6	33.3	85.7	8.6	64.3	25.0

6) 社団法人全国保育士養成協議会 2000 平成12年度全国保育士養成セミナー実施要項 養成校の役割と今日的課題 (提言：豊永家壽子) pp123

6. 保育経験1～2年目の参加者の感想

参加者アンケートにおいて、セミナーの感想、今後の要望などを尋ねたところ、「今後も継続してほしい」「また参加したい」等の意見が多く得られた。参加者数の状況、アンケートの結果などをとおして、卒業生の再教育の場の必要性和意義は極めて大きいことがわかる。

卒後教育の最初の入り口といえる保育経験1～2年目の保育者から寄せられたセミナーの感想を概観する。表5～表7に2007年度～2009年度におけるアンケートの詳細をまとめた。

「軽度発達障害」については、2006年度と2007年度に2年続けてテーマ設定したが、2年目の保育者でアンケートに回答した20名のうち7名が同じテーマのリピーターであった。「昨年も参加し、理解を深めた」「事例があり、興味深く勉強になった」等の感想があり、新任期には、同じテーマを深める機会もいいのではないかと考える。

2008年度は、「保護者対応」についての内容であったが、1年目の保育者から「経験も浅くトラブルはないが、モンスターという言葉が頭にあり、おびえて保護者と接していたように思う。もっと積極的に保護者と接し、関係を深めていきたい」「まだ、問題は起こっていないが、どのように対応すべきか、ポイントは何なのかを学ぶことができた。今後に活かしていきたい。」「1年目でそういう状況になったことはないが、初期対応の大切さを知れてよかった。」といった感想があり、社会的関心事ともいえる保護者対応について、新任保育者が先入観のみで判断することがないように、早い段階からこういったセミナーを通して、認識を深める必要性がみてとれた。

2009年度は、絵本の素晴らしさを再認識するとともに、「絵本を理解して心をこめて丁寧に読み伝えたい」「絵本のねらいを明確にして選びたい」「絵本をもっとたくさん読んで伝えたい」といったように、「今後の保育に活かす」とした感想が多かった。また、「こどもの反応を気にしすぎていた」といった反省も寄せられ、新任の保育者にとって「絵本」という身近なテーマは、養成校在学中に学んだ理論や技術を保育の実践の場で結びつけることにより、新たな気づきや課題を見出す良い機会となったとい

えよう。

7. まとめと今後の課題

本稿では、保育者養成校が担う卒後教育のあり方を考察した。現職保育者が求める学習内容としては、保育経験年数や職位などによって異なることも考えられ、卒後教育においては、保育者としてのライフステージを見通したプログラムが必要であるといえる。例えば、新井(2000)は、保育士養成校の現職教育事業に対する保育士のニーズ調査により、現職保育者が希望する研修内容をまとめている。それによると、職名別の希望研修内容では、園長と主任は子育て支援や保護者との連携、カウンセリングなど、保護者に対する支援に関する内容を希望し、正規保育士や嘱託保育士は、音楽、集団ゲーム、ペープサートなどの実技系の研修を希望している。さらに正規保育士について在職年数別にみると、音楽、運動遊び、ペープサート、集団ゲームなどの実技系の希望は10年未満に多くみられることから、少なくとも就職後数年間は、養成校で学んだことを基に対応できる程度の力量を身につけておく必要があるとしている⁷⁾。本稿におけるセミナーの参加者について、保育経験年数別にみたのは、2007年度から2009年度の3年間のみの分析によるものであった。実技系の内容を提供した2003年度、2005年度の参加者から得られた感想や要望などについても今後検討しておくことが求められるだろう。

卒後教育は、現職保育者の学習の場であると同時に、卒業生の悩みや不安に応える場としても必要なものである。卒業生が養成校に何を求めているのか、卒業時への学生へのアンケートを実施するなどして、保育者養成校としての卒後教育のあり方を今後も考えていきたい。保育の質の向上を図るために、養成段階から卒後の研修段階へと継続する一貫した保育者養成教育について、検討を続けていく必要があるといえる。

*本セミナーについては、教員組織の中の「将来検討委員会」で検討がすすめられ、初めの5回は「将来検討委員会」が、後半は「サマーセミナー委員会」が主となって企画・準備を担当してきました。本稿は、「サマーセミナー委員会」の委員

7) 社団法人全国保育士養成協議会 2000 平成12年度全国保育士養成セミナー実施要項 養成校の役割と今日的課題 (提言：新井美保子) pp124-125

3名（高田、橘、森）がセミナー開催10年目の区切りに合わせて、これまでの成果と課題をまとめたものですが、当日の運営には、聖和短期大学の全教員と関係事務部署職員が様々な役割を担い、開催されたことをここに付記いたします。また各回のセミナーにおいて、学外講師としてお世話になりました諸先生方に心から感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 学校法人聖和大学 1998年度～2004年度 年次報告—自己点検・自己評価報告書
- 学校法人聖和大学 2005年度～2008年度 事業報告書—自己点検・自己評価報告書
- 川池智子 2008 保育者の「子育て支援」に関わる専門性とリカレント教育（その1）—山梨県内の保育士への調査結果をてがかりとして— 山梨県立大学人間福祉学部紀要 Vol. 3, 19-32
- 小松秀茂、杉山弘子、東義也、荒川由美子 2009 保育者が養成校に求めている学び～卒業後2年目の保育者への質問紙調査から～ 尚綱学院大学紀要第57集 79-90
- 無藤隆、麻生武編著 2004 教育心理学 北大路書房
- 杉山弘子、荒川由美子、東義也、石田一彦 2007 保育者養成校における学びの形態 尚綱学院大学紀要第55集 91-100
- 社団法人全国保育士養成協議会 2000 平成12年度全国保育士養成セミナー実施要項 122-125
- 社団法人全国保育士養成協議会 2004 平成16年度全国保育士養成セミナー実施要項「次世代育成支援時代にあらためて問われる保育の原点—子どもの最善の利益を支える保育士の養成を目指して—」 117-124
- 社団法人全国保育士養成協議会専門委員会 2003 保育士養成資料集第38号保育士資格の研究～法令資格から法律資格へ その本質を探る～ 社団法人全国保育士養成協議会 90-91
- 高旗正人、中田周作、池田隆英 2007 保育者養成に対する社会的要請の調査研究 中国学園大学紀要, 6 149-160

表 5. 2007年度 保育経験 1・2 年目の参加者の感想

内容分類	感想の概要
活かすに	障害を持つ子どもの対応に参考になった。
	昨年も聞かせていただき、とても役に立つ話が多かった。日々の保育の中で役立たせたい。
容易に理解	事例があり、わかりやすかった。
	事例があり、興味深く勉強になった。昨年も参加。
	具体的で楽しく聞くことができた。
	事例があったのでおもしろかった。昨年の話を思い出しながら聞いた。
	非常にわかりやすかった。保育に役立てたい。研修時間がもう少し長くてもいい。
	レジメ、内容がわかりやすく、勉強になった。具体的な説明が良かった。
理解力向上	わかりやすい内容で理解が深まった。
	具体的で有意義であった。自分の中で深めていきたい。
	とても勉強になった。勉強してきたつもりだったが、よく理解ができていなかったの、改めて学べた。
	それぞれの特徴があることを知り、勉強になった。
	とても勉強になった。昨年も参加し、理解を深めた。
	昨年に引き続き聞けることができた。自閉症について知識を深めることができた。保育につなげたい。
自閉症の種類と対応の方法などが理解できた。発達障害の考えが判った。	
有意義	聞きやすく、勉強になった。
	自分のためになった。

表 6. 2008年度 保育経験 1・2 年目の参加者の感想

内容分類	感想の概要
今後に活かす	初めて知ることや、こういう考えがあるということに気づいた。現場で出会うかは分からないが、知識に変えて活かしていきたい。
	まだ、問題は起っていないが、どのように対応すべきか、ポイントは何なのかを学ぶことができた。コミュニケーションは難しいが、話すことから始めていい関係を作っていきたい。今後に活かしていきたい。
	1年目でそういった状況になったことはないが、初期対応の大切さを知れて、良かった。
	保護者への見方が変わった。学んだことを活かしていきたい。
	とてもわかりやすい説明であった。今日のことを活かして保育していきたい。
	保護者との関係について、様々なことを学んだ。子どものために活かしていきたい。
	保護者の問題、職場の環境が大切と感じた。保護者対応を振り返る機会となった。自分を見直すと共に、今後の保育、保護者対応に活かしていきたい。
	自分の考えを見直す機会になった。気持ちを新たにはつらつと子どもに接したい。
	大きなイチャモンを経験したことはないが、これからの参考になる。保護者とのいい関係を築いていきたい。
	楽しかった。熱い言葉に元気をいただいた。モンスターという言葉で片付けしないで、しっかり向き合っ対応していきたい。
容易に理解	ポイントを押さえ、具体的に話していただき、勉強になった。
	聞きやすかった。
	子どものために、保護者、専門家とどう関わっていけばいいか、よく分かった。
	イチャモンの捉え方、対応がよく分かった。イチャモンを身近に捉えることができた。
	とてもわかりやすかった。
	具体的な内容でわかりやすかった。
自分の抱えている思い、もやもやとした気持ち、悩みに答えていただいたように感じた。言葉が響いた。	
理解力向上	始めて知ることや、こういう考えがあるということに気づいた。現場で出会うかは分からないが、知識に変えて活かして行きたい。
	こちら側の対応で、保護者が変わることも学んだ。勉強になった。
	経験も浅くトラブルはない。しかし、いつもモンスターという言葉が頭にあり、おびえて保護者と接していたように思う。もっと、積極的に保護者と接し、関係を深めていきたい。
	保育者として、人間として大切なことをたくさん教えていただいた。子どものためにできることをしていこうと考えた。
	対応の仕方や自分の考えについて分かった。
	楽しく話を聞くことができた。いろいろ知ることができた。
	話を聞いて良かった。話を聞いて、そういう考え方があるんだなと思い、気づいたり、納得した。
保護者とのかわりに不安があったが、保護者の話を聞き、話し、対応していけばいいと思った。	

表 7. 2009年度 保育経験 1・2 年目の参加者の感想

内容 分類	感想の概要
今 後 に 活 か す	絵本を理解して心をこめて丁寧に読み伝えたい
	絵本のねらいを明確にして選び、伝えたい
	絵本をもっとたくさん読んで伝えたい
	絵本が好きになるように働きかけたい
	もっとたくさんの絵本と出会いたい
	自分も楽しんで読んでみたい
	明日からの保育に活かして行きたい
	絵本について考えることを職場に伝えたい
	絵本の時間を豊かに大切にしたい
再 認 識	絵本の素晴らしさを再認識
	絵本についてあらためて考える機会を与えられた
	絵本の大切さを再認識
理 解 力 向 上	絵本の奥深さを認識
	絵本を違う気持で読んで、楽しんで心をつなぎたい
	絵本をどう選びどう読むか学ぶことができた
	絵本は人を育てることがよくわかった
	絵本についてあらためて考える機会を与えられた
	絵本の見返し扉の大切さがわかった
	絵本を通じてこどもの心の育ちや動きがわかることを学んだ
	絵本に対する視点が変わった
	絵本の意味と役割がわかった
声を出して読むことの大切さがわかった	
反 省	絵本をもう一度読み直したいと思った
	いい加減な読み方をしていたと反省
	こどもの反応を気にしすぎていた
本 の 紹 介	絵本を紹介していただき参考になった
	紹介された絵本を販売してほしかった
	幼児の絵本のことをもっと知りたかった